**血天井**

1600年8月1日、劣勢となり、武将石田三成の軍勢から逃れる策はないと、380人以上の武士が伏見城の城内で自決することを選択しました。

彼らは、軍隊を結集し、江戸幕府（1600 -1868）を設立した封建時代の将軍、徳川家康に忠誠を尽くした。家康は伏見城に守備隊を残しました。伏見城のレプリカは、京都伏見区の同じ場所にあります。

40,000人の三成軍に包囲された防衛軍は、城が放火されるまで2週間耐え続けた。家康軍の残党は最後の戦いのために砦に結集したが、勝ち目がないことを知ると、切腹して自害した。

血に染まった砦の床板は後に回収され、様々な寺院に渡り、祀られているのは供養を目的としています。そのうち16枚の床板が、後に宝泉院の天井に使用されました。

自害した武士達の最後の瞬間を記録しているこの床板は注目に値します。床板全体に血が付いており、血でくっきりと残された足跡や、鎧、甲冑の位置がわかる箇所もあります。

人間の顔がうっすらと認識できる箇所があり、別の箇所では、最後の呼吸をした武士の血まみれの指紋が擦り切れているように見えます。

防衛軍の抵抗により、徳川家康が部隊を指揮するのに十分な時間を与え、伏見城の陥落から2ヶ月以内に関ヶ原の戦いで敵軍を破りました。